



生涯学習時代における

公運審の役割と課題

異質が水平に交流する出会いと気づきの

公民館活動・委員活動をめざして

西村

美東士

昭和音楽大学短期大学部助教
／L・NETワークス通信員利用者、委員、職員それぞれの
主体性による協働

(一) トップ・ダウン論からの脱却を

公民館運営審議会(公運審)は社会教育法第二十九条によると「館長の諮問に応じ、公民館における各種の事業の企画実施につき調査審議するもの」とされている。しかし、実際の委員活動においては「調査審議」をするだけというわけにはいかないだろう。「調査審議」を中心としながらもそれをおしきり、公民館活動に幅広く関わり、よきリーダーシップを発揮することが求められる。そのときの課題は、何をすることが公運審委員のリーダーシップなのかということである。

いつまでもなく、公民館は学習者の主体的な活動によって成立するところである。万一、公運審の活動がそれを阻害するようなものであるならば、それはリーダーシップとはいえない。

ところが、そういう本末転倒な状況もあるがちなことはいえないのである。たとえば、「わが町の住民は学習欲求水準が低いから、公運審委員等の高い見識による啓発が期待される」などというトップ・ダウン(上から下へ)の考え方が会議の席上で堂々と披露されたりしている。学習欲求水準が低いということとは、自らが生きるといふことに関心がないということである。いったい、どこにそんな住民がいるのか。そんなことをいう余裕があるのなら、その前に、住民のリアルな学習欲求に気づかない自分のアンテナのお粗末さを恥じたらどうか。住民の潜在的学習欲求を顕在化できない公民館活動の真困をどうにかしたいと思つたらどうか。

(二) ワン・オブ・ゼム論からの脱却を

上のトップ・ダウン論の裏返しに「ワン・オブ・ゼム(彼らのうちの一人論)」である。「自分たち委員だけ、住民の一人ではない」といふ意識は、

一見、謙虚で民主的なことのように感じられる。たしかに「私は住民の一人である」というのはごく当たり前のことなのだが、それでは、どんな姿勢で公運審活動に臨むのか。そこには、「自分は住民の一人であるのだから、商業せずとも住民の意見を代表できる」という安易な姿勢や、場合によっては「自分は住民の代表であるのだから、自分に反対する者は住民の敵である」という傲慢な姿勢が隠れている。住民は「自分が学びたいことを学びたい手段で学ぶ」という生涯学習主体であるが、「ワン・オブ・ゼム論」はそれとは異なる委員としての自らの立場を忘れている。あるいはそこから逃げ出している(この場合は「よきリーダーシップなんがありえない」という敗北主義)といわざるをえない。

蛇足になるが、議員としてさういう人がいるのだから驚いてしまふ。そんな人は、さきさき研表を出して、言葉どおり住民の一人として自主的活動を行えばよいのだ。職員や委員は、住民と水平に、しかも、異質を交流しあうべきであつて、「ワン・オブ・ゼム論」で住民と同一化してしまうのでは非民主的である。そもそも、住民にだって、ただの「ワン・オブ・ゼム」はいない。みんな、個性をもった別個の存在はずである。「ワン・オブ・ゼム論」は、「みんな同じ考え方と意見をもつ仲間だ」というぼくたちが陥りがちな現実逃避の妄想にすぎないのかもしれない。

(三) 公運審と利用者、職員との協働

トップ・ダウン論とワン・オブ・ゼム論の双方からの脱却のためには、次のヘッドシップとリーダーシップとの違いがヒントになる。ヘッドシップとは「組織が階層的な上位者に公認している、制度上の権威に依存する指導現象」であり、リーダーシップとは「指導者個人の魅力や能力に依存する指導現象」である。(見田宗介他「社会学事典」弘文館)。ゆえにリーダーシップは流動的で柔軟なものであり、トップ・ダウンでもワン・オブ・ゼムでもなく、住民が自発的に支持を寄せることによって成立する。異質どうしが水平に交流するネットワークの関係であるといえる。

このネットワーク型の関係を「協働」と言い換えることができる。神奈川県生涯学習審議会答申「学習社会がなぐわを展望した生涯学習振興の基本的方策について」(平成六年五月)では、次の二つの視点から、行政と民間とのこれからの望ましい関係を「協働」とあるとしている。「役割の違いを踏まえた上で、施策や事業の推進を協力しあう」という「役割関係」の重視、県民を客体(対象)としてとらえるのではなく、県民の「主体的参加」の重視。このように、協働とは、双方の主体性とともに発揮される関係である。そして、公運審活動においても、利用者と職員との協働関係をつくりだすことが必要なのである。

公民館で、公運審で、

すべき人間関係を

(二)「1%の批判」を歓迎する

以前、ぼくはある公民館の公運審委員の研修会に呼ばれたことがある。いつもの講演のとおり、開口一番、「misterちゃんといいます。疑問や反論があったらいつでもぼくの講義をささげてください」といって。これを「ちょっと待った方式」と呼んでいる。大学の授業もこれでやっているが、実際に「ちょっと待った」がかかるのは幸が不幸が年間に「一回」であり、授業の進行にさびつかえて困ったという経験はない。ところが、その公運審では様子が続いていた。講義の半ばあたりから、元氣印の婦人愛媛たちのあちこちから「ちょっと待った」がかかったのである。ぼくにこそ最も刺激的でもしろかった。ほかの委員もライブ感覚を養ったのではないかとと思う。ただし、予定した話をする時間がなくなってしまうとちょっと困ってしまったが……。

ぼくは「1%の批判」という言葉（レトリック）を使っている。100人のうちの一人があることに批判をもったとする。たとえば1%の登校拒否児のように。その「1%の批判」の気持ち、他の99%の支持のな人も各人が1%ぐらいもっているはずなのだ。だから、「1%の批判」がのびのびと表明されれば、それは必ず他の99%の人からも共感されることになる。

なる（共感とは同意とは違う）。学生がなかなかそれをできないのは、本質的にはあとに述べるピア・コンセプトのせいだと思われるのだが、要は「これは自分だけの考えなのだから、他の学生の学習にとっては迷惑かもしれない」と恐れるからである。学習はそもそも自分のためにするのだから……。そのわりには、他者の学習権を侵害する私語等の行はは無意識のうちに蔓延する。これに対して、さまざまに「1%の批判」(愛媛の個性)が飛び交う学習の場は、おもしろくなるし、アンビバレンツ(両面価値)である真実により「歩近」の結果にもつながるのである。

(三)ピア・コンセプトの悲しみ

生涯学習社会以前の学校歴偏重の下で競争社会では、なかなかの公運審委員の研修会のようにはいかない。それ、一人ひとりが仲間からいふ足を引っ張られるかわからないから、仲間にあわせてふり(仮面)をしているだけではない。「防衛的風土」に満ちているからである。このみじめな集団風土は、個々人の内面としてのピア・コンセプトによって支えられている。ピアとは「なにかし仲間」のようなものである。仲間を大切にすることによってよい仲間となるのだが、それは個々人を抑圧して仲間と同一化しようとする意識にもつながりがちなのである。

現にこの話をした大学の授業で、「友達から愛と思われたらもう終わりだ」と「出馬ペーパー」に怒ったよ

うに書いてきた女子学生がいる。現代社会のなかで、そこまで痛く感じて生きている人たちがいるのだ。ちなみに、学生の授業中の私語も、ぼくはピア・コンセプトの悲しみに表れていると聞いている。熱心に授業を聞いている他の学生の迷惑よりも、仲良しの友達への同調が優先される。また、まじめな学生が、他者の私語を「やめてくれ」といえないでいるのも「仲間から浮き上がりたくない」とピア・コンセプトの表れである。学習権とは、こういうこと、みずからが必死になつてみずからピア・コンセプトを乗り越えて主張すべき権利なのである。

(三)信頼と共感にもとづく

ネットワークを

異質が水平に交流する支持的風土、公民館や公運審の活動は「防衛的風土」と反対の「支持的風土」でありたい。この風土の特徴は次のとおりである。

(1)仲間としては、自信と信頼がみえる。例えば、自分がこの集団に属しているという自信に満ち、みせかけを装う必要が少なく、感情と態度を気象に示し、仲間と同調しない場合もそれを率直に示すことができるが、メンバーに肯定的な感情をもっている。

(2)組織としては、寛容と相互扶助がみえる。例えば、潜在的な敵意が少なく、争いが少なく、組織や役割が流動的である。

(3)目標追求に関しては、自発と多様がある。

多い。例えば、その追求の方法は、正直で、率直で、開放的で、上下、左右のコミュニケーションが多く、積極的な参加が多く、全員が自発的、創造的に仕事にかかり、多様な評価がなされる。(J・R・ギッペン)

みせかけの同調をするのが「支持的風土」なのではない。人間は無知であり、非力である。それを自覚(無知と非力の自覚)してもなおかつそれを受容して、自己への信頼と共感が生まれる。自分が、あるいは、特定の人物だけが、真実を完全に把握しているというわけではないのだ。だから、せっかくながら思い切つて発言したのに公運審全体としては聞き入れてくれなかったからといって不満をもつのも間違いだと思ふ。自分の話をすべての委員が心から聞いてくれたのなら、それをもってよしとしなければならない。公運審全体という「群」に対する「一委員の「授業」としての存在確認とは、どれだけ自分の納得のいく提案の仕方、「自分が」できたかというかということであり、幹と枝葉、それが満足できるものならば自分の胸のうちに「さややかな風」が吹き抜けているはずなのである。これが授業同志の「支持的風土」をつくりだすための心構えであろう。

この世のだから宇宙の全体像を把握しているというのか。しかし、それでも人間は生きている。生きているから真実を知りたいと思う。どこまでも知りたいたい。事実より真実、真実に近づきたい。十八十色、百人百様のた

